一通の速達から

女性からの速達が、それも大きな封筒のずっしりした速達が編集委員会あてに舞いこんできたのは、涼しい夏、冷たい夏がはじまってまもなくだった。

何かの原稿だろうか？

まずそう思った。しかし、速達が差し出されたのはいわゆる首都圏、東京周辺のベッドタウンの市である。遠い土地で「渡世」を郵送で読んでくれている人もいないではないが、東京近くのその市には心当りがなかった。

ともかく大きな封筒をひらいてみた。

すると出てきたのは、ここに掲載する二枚の写真であり、意外なことにわが「渡世」の古い号の一部のコピーであり、それらを説明する長い手紙であった。

尋ね人ではあったけれど

——わたしといっしょに暮している青年の身の上は……

と手紙は書き出されていた。

あらまし次のような具合である。

——彼（その青年＝H君）は京都で生れ、京都と富山のふたりのおばさんの間を行き来しながら富山の高校を出て上京しました。彼が二歳の時に両親が離婚し、母は再婚。父親には何度か会ったことがある程度だったようですが、おばたちからは、釜ヶ崎というところにいるらしい、アル中で体をこわしているようだと聞かされたそうです……

尋ね人だな、と読んでいる方は思った。

年がら年中、無数の尋ね人広告がまちのいたるところに出ている釜のこと、尋ね人の相談なら以前にも二つや三つはされたおぼえがあるのだった。

その直感は当った。

しかし同時に、はずれでもあった。

また手紙のあらましを書きうつすことで当りとはずれの実際を見てもらおう。

手紙はこんなふうにつづいている。

——ところが六月、大阪の貝塚市のサナトリウムで死んだという知らせがあり、翌日彼Hがサナトリウムに行って遺体を引きとり、お骨にしてもらって京都のおばの家で通夜をしました。通夜にはわたしも行きました。

亡くなった人は西成区からの月々一万数千円のお金でくらしていたようですが、遺品は全くなく、現金、貯金通帳、印かんなどもなく、死因は心不全ということですが、生前のことは何もわかりません。

ただ、元気なころ、時々京都へよこしていた手紙などは見せてもらいました。そのなかに雑誌の「労務者渡世」があり、入選した短歌が出ていました。その歌のページをコピーして同封します。また、やはり京都に送られていた写真も同封します……

つまり、尋ね人にはちがいないのだ。

しかし尋ねる人はすでに亡くなって骨もせがれさんに引き取られている。

何と言えばいいのか。

人間としてはもう生涯を終ってしまった人の、終る前の生き方はどんなものだったか、せがれのH君がそれを知りたがっている。H君といっしょに暮しているわたしもその点では同じ気持だ、そちらの編集委員会で何か少しでもわかりませんか、教えて下さい。

手紙の趣旨は以上のようになっていた。

第一回「渡世賞」のこと

さて送られてきたコピーである。

これはすぐわかった。何しろこちらが発行元なのである。

十九号、足かけ五年まる四年前の一九七六年十二月発行で、第一回の渡世賞入選作を発表している。そして生前の様子を尋ねられている人は、短歌の部に「比呂志断腸歌集」の題でまとめて応募した人で、うち六作が入選したのだ。

編集委員の誰のアタマにも、その比呂志さんの大きな躍るような字の並んだ原稿のおぼえがあった。

「えっ、じゃあこの写真が……」

一人はあらためて写真を手にとった。
そして、こう言った。
「そうだよ、ちょっとわからなかったけどこれは比呂志さんだよ、死んだのかあ。入選したあの原稿、手渡しでおれによこしたんや。やっぱり少し飲んでるような顔して……」
亡くなった作者、比呂志さんを偲ぶ意味で入選になった短歌をここに再録しよう。

連作「比呂志断腸歌集」抄

挫折せしにがきくるしき若き日よ傷口いまだ血を噴いてやまず

嗚呼母よ臨終の際に手を伸べぬ強く正しく誇らかに生きよと

阿呆やなあと姉ため息つきぬ冬寒き日シ■ールの姉の髪の匂いき

姉逝きぬ虚空に向い言葉なくもし霊あらば我にこたえよと

夜学に通う幼き日々の吾なりしあの夕焼けをなつかしく思う

往き往きて果して何を唱わんか淀川べりの野の花に問え

自分の短歌の出ている「渡世」を、比呂志さんは京都にいる姉か妹か、わが子を育ててくれた女きょうだいに送ったのだ。きっと、もう口にも手紙にもできないわび言の代りだったろう。それからまた、とにかくいまはこんなふうにやっているよという、ささやかな自慢でもあったろう。
比呂志さんは「渡世」の自分の作品のそばに、次のように書いている。
――はじめて文学賞を取りました。賞金は千円でしたがうれしかった。一等が一万円です……
「あのひと、賞金は受けとらなかったな、カンパしますよってことで。それと、あのひとは入選してないものをもっといろいろ書いてきてたはずや、しまってないんか？」
「いやあるで、きっちりあるで」
と編集委員の話もはずみがついて、なるほど応募原稿は整理保存されてあり、見て行くと比呂志さんの文章が

出てきた。
子供のころの思い出から最近の感想までを一気に書いたものである。
ほんの少々の部分を、やはり比呂志さんを偲ぶ意味で紹介しよう。

――私は嫁さんをもらうまではかなり親孝行したつもりだ。ただ、あとが悪かった。男は女をもらうと少しは頭がボケるのかも知れない。いや、これは私個人の未熟さであったろう。愛だ、何だ、セックスだ、と何だかわからぬうちに、私は嫁さんに逃げられた。甲斐性がなかったのと、大きな声で言えないが於芽孤の仕方が下手やったんやという友達の意見もあるが、私は信じない。
三歳になった息子を姉に預けて私の流浪が始まった。釜に来たのは万博のあとだった。
最初、平山という飯場から片山鉄工のカリッケ見習に行った。面白かったが、マンボが安かった。山谷へ行き、釜に帰りなどしているうちに、もう五十になった……
――ヤンカラと三角公園、そして飯場から帰るたびに白髪がふえて行った……
――私にはこの釜ケ崎が離れづらい。もし死んだら花園公園の片すみに埋めてもらおうか知らん？……

多分、わが愛するトモダチ達はタマにその上にヤンカラでもそそぎかけてくれるにちがいない。
ああ、今日も絶好の秋日和だ。
でもなんで天ちゃんの五十年キネンなんてやりよるねんやろ？
日本はオクレトルナア。
（これは何かなあ生活記録になるのかな）

ペンネーム　阿喜礼　多世

さらに生前の消息を

入選した「断腸歌集」の原稿もむろん保存してあったので、編集委員会はそういう一切と渡世賞応募記念に作った手拭いなどを、速達をよこした女性、そしてその女性といっしょに暮している比呂志さんのせがれの青年H君あてに、こちらも速達で贈呈した。
また、比呂志さんから原稿を手渡された編集委員会の一人は、日ごろ顔見知りだった比呂志さんの生き方について手紙を書いた。
受けとったH君、いっしょにいる女性、二人からはていねいな礼状がとどいている。
写真をみて、これはおれの飲み仲間だとか仕事の相棒

だとか、思い出した読者がいたら是非編集委員会に知らせて下さい。

生前の消息を、もう一度でも二度でも、せがれさんに伝えたいと考えています。

亡くなった比呂志さんは五十二歳だったそうです。

編集委員会

1979年釜ヶ崎夏祭り　三角公園にて

↓中島さん